「ラーニングライフ　第8回学生の学修に関する実態調査報告書」に係る対応計画進捗状況等について

部局	調査結果から読み取れる事項とその対応計画				対応計画進捗状況等
		事項（問題点・優れた点等）		対　応　計　画　等	
総合科学部	1	図書館利用の低迷が常態化しつつある。	(1)	SIH道場で図書館の説明を行い、利用を呼びかけた。	令和6年度新入生オリエンテーションにて利用案内を予定している。
	2	国際教養コースを除く３コースにおいて英語学習の機会が学年が上がるにつれて減少する。	(1)	学部において継続的に語学学習を促す学習指導を行う。	令和6年度新入生オリエンテーションにて周知を予定している。
医学部医学科	1	医学科全体のアンケート回収率は1年生55%、3年生41%と低い回収率であり、他学科に比較しても平均を下回っていた。	(1)	アンケート実施時期の授業においてアンケート回答を促す。	アンケート実施時期の授業においてアンケート回答を促した。
			(2)	1年生・３年生の担当教員が講義の時間帯のなかで、アンケートへの回答を促すアナウンスをする。	1年生・３年生の担当教員が講義の時間帯のなかで、アンケートへの回答を促すアナウンスをした。
	2	1年生、3年生ともに予習・復習時間が絶対的に不足している学生が一定数おり、成績不振の一因になっていると推測される。また、3年生になっても、将来の見通しを持っていない、あるいは将来の見通しを持っていても何をすべきかわからないという学生が32%いる。 卒業後の進路について教職員に対して個別に相談すると回答している学生が80%にいる、一方、クラス担任制度に「とても満足」、「満足」と応えている学生は1年生23%、３年生10%と低くなっている。 学部卒業後に大学院進学を希望しているものが1年生では10%と比較的高いのに対し、3年生では2%と激減している。学年が上がり専門医志向が強まる一方で、研究の魅力や大学院進学の意義が学生に十分に伝わっていない。	(1)	１年次のグループ担任によるグループ面談を年２回に増やし、２年次でも実施する、３年次の医学研究実習中間ヒアリングを活用する。４年次メンター制度による面談を５年次以降でも実施する等のメンタリングの充実をはかる。また、低学年の面談にもキャリア形成に関する内容を盛り込み、低学年から将来を見据えた学修姿勢を習慣づけるように促す。また、成績の状況を見て学習時間が不足している学生については面談等で早い段階からの個別対応を行う。	１年次のグループ担任によるグループ面談を年２回に増やし、２年次でも実施した。３年次の医学研究実習中間ヒアリングでも学生生活全般についても面談を行った。４年次メンター制度による面談を５年次以降でも実施する制度を導入した。また、低学年の面談にもキャリア形成に関する内容を盛り込み、低学年から将来を見据えた学修姿勢を習慣づけるように促した。また、成績の状況を見て学習時間が不足している学生については面談等で早い段階からの個別対応を行っている。
			(2)	StudentLab部会が中心となって、研究医枠学生への支援を含め医学研究活動の充実を進めていく。医学研究実習では理工学部など受け入れ先の選択肢を増やし、学生の希望に沿った研究が行えるよう環境整備を進める。キャリア形成の指導の際に、臨床医学における研究の位置づけ・意義についても積極的にアドバイスを行う。	StudentLab部会が中心となって、研究医枠学生への支援を含め医学研究活動の充実を進めている。医学研究実習では理工学部など受け入れ先の選択肢を増やし、学生の希望に沿った研究が行えるよう環境整備を進めている。キャリア形成の指導の際に、臨床医学における研究の位置づけ・意義についても垂直連携講義などを通じて、積極的にアドバイスを行っている。
	3	１年生では実験、実習、フィールドワークなどを実施し、学生が体験的に学ぶ機会があったと回答している学生が34%にとどまっている。また、１年生、３年生ともに地域社会が直面する問題を理解する能力や国民が直面する問題を理解する能力が増えたと感じている学生が30-40%と少なく、他の人と協力して物事を遂行する能力、人間関係を構築する能力、コミュニケーション能力が増えたと回答している学生も半数程度にとどまっている。医学科でフィールドワークや早期臨床体験としての地域医療学修が不足している状況が反映されていると考えられ、入学後、早い段階から同僚や他の医療職メンバーと信頼関係を築くことができるような実習の機会を増やしていくことが必要である。 授業時間以外に課題や予習、復習に11時間以上を費やしている学生は、１年生では42%と他学科よりも多いのに対し、３年生では24%と減少している。日常的に自身の学修内容等を振り返り、改善点を見出して向上を図っている学生も、１年生、３年生ともに半数程度にとどまっており、アクティブラーニングの推進と併せて、予習・復習習慣や常に省察する習慣を涵養していくことが必要である。	(1)	SIH道場における「振り返りワークショップ」や「蔵本地区合同ワークショップ・チーム医療入門」等の充実をはかることで、入学後、早い段階から同僚や他の医療職メンバーと信頼関係を築くことができるような実習の機会を増やしていく。また、低学年から地域社会の問題を理解し、社会医学実習、臨床実習との垂直連携を促進するために、低学年での地域社会での実習の実現に向けて、カリキュラムについて検討を行う。	SIH道場における「診療現場見学」「振り返りワークショップ」や「蔵本地区合同ワークショップ・チーム医療入門」等の充実をはかり、早い段階から同僚や他の医療職メンバーと信頼関係を築くことができるような実習の機会を増やした。また、低学年から地域社会の問題を理解し、社会医学実習、臨床実習との垂直連携を促進するために、低学年での地域社会での実習の実現に向けて、カリキュラムについて継続して検討をおこなっている。
			(2)	SIH道場に始まり、各学年において、年間を通じて省察の機会を何度も設けていく。	SIH道場に始まり、担任との面談、メンター制度を用いて、各学年において、年間を通じて省察の機会を何度も設けた。
	4	英語の学習状況については、聞く力、読む力、会話力、表現力、書く力のいずれの項目も入学後から調査時までの向上が実感されていない。 1年生、3年生ともに教養教育、専門教育で行われる英語教育において、現状では不十分と思っている学生が約６割おり、ネイティブスピーカーの教員による授業を増やしてほしい、専門英語の時間を増やしてほしい、専門英語のライティング、会話に重点を置いた授業を増やしてほしいといった希望を持つ学生も多い。	(1)	専門英語の医学研究実習や医学英語の拡充とともに、教養から専門、卒業まで一貫した英語教育のカリキュラム整備に取り組む。また、学内外の医学に関するオンデマンド英語教材を有効活用し、継続的な英語学修を促す。	専門英語の医学研究実習や医学英語の拡充とともに、教養から専門、卒業まで一貫した英語教育のカリキュラム整備に取り組んでいる。また、ハワイ大学のオンデマンド英語教材の導入に向けた準備を進めている。
			(2)	医学英語を含めグローバル化教育を中心的に担当する教職員体制の充実をはかる。令和５年9月から利用開始予定の医歯薬学共創プラザの国際交流スペースの活用・管理体制と関連付けて、全学ならびに蔵本地区全体のグルーバル化教育充実の観点で協議を開始する。	医学英語を含めグローバル化教育を中心的に担当する教職員体制の充実をはかった。医歯薬学共創プラザの国際交流スペースの活用・管理体制と関連付けて、全学ならびに蔵本地区全体のグルーバル化教育充実の観点で協議を継続して実施している。
医学部医科栄養学科	1	教員との関係性： 「教職員に学習に関する相談をしたり、学内の学習支援室を利用したりした」（問 30）、「大学の教職員に将来のキャリアの相談をした」（問 32）、「オフィスアワーなど、授業時間外に教員と面談する」（問 37）といった項目に関して利用頻度が低い。 「キャリアカウンセリング」（問 122）、「クラス担任制度」（問 123）や「教員と話をする機会」（問 101）についても１年生および３年生ともに満足度は低い。	(1)	クラス担任制度に基づく早期研究室体験（対面）や学年懇談会を順次再開しており、教員と対話する機会を積極的に増やしていく。また、3年次1月以降に研究室配属が始まり、教員と話をする機会が増えるため、卒業時点では大きく改善している（令和4年度卒業時アンケート）。	低学年へは、クラス担任制度に基づく早期研究室体験（対面）や学年懇談会を順次再開しており、教員と対話する機会を積極的に増やしている。また、３～４年生へは、配属先研究室の指導教員が、研究室での日々の活動を通じて細やかな指導を継続して行っている。こうした指導教員による綿密な面談・指導を継続している。
			(2)	3年次冒頭に実施するオリエンテーションにて、徳島大学で受けられるサポート等について周知を行う。	令和5年度に実施した3年次オリエンテーションにて、キャリア支援室担当者による説明の機会を設けた。次年度以降についても継続して機会を設ける。
	2	大学入学後の学修状況について： 「授業時間外の授業課題や準備学習、復習をする時間」についても、１週間あたり 11 時間以上と回答したものは１年次で 16%に対し、３年次では 28%であった（問 35）。授業時間外学修にかける時間が少ないことが懸念される。	(1)	「授業で用いる資料をmanaba等に事前にアップし、予習を促す」 「A4用紙1枚程度の簡単な予習レジュメを毎授業配付し、次の授業への導入とする。また当該レジュメには、前の授業の復習内容も記載されており、学生の反復学習を促している」 「授業後に授業内容の要点についてまとめる課題を行うことで、授業内容の理解を促す」 など、好事例を教員内に周知するとともに、学生の授業時間外学修の重要性とその改善策をまずは教員間で共有する。	7月27日医科栄養学科教員会議にて医科栄養学科教員に伝え、確実な実施を促している。
			(2)	成績の状況を見て学習時間が不足している学生については面談等で早い段階からの個別対応を行う。	成績状況や授業受講状況を鑑みて、教務委員並びにクラス担任等による面談が必要な学生についてはこれまでも対応してきたところであるが、今後も本取り組みを継続していく。
医学部保健学科	1	「将来の見通しを持ち、何をすべきかわかっている」と答えた1年次と3年次の学生はそれぞれ6割と7割で、全学より共に1割程度高い特徴を持つ。最近数年間の調査結果と同様である。	(1)	幅広い学修の促進を目的として、専門性を志向した学修方法を冊子「学修の手引」やSIH道場の教育プログラム等を通して入学時に提示し、将来像をイメージした「学修設計」の立案を指導している。学修計画に沿った学修ができるよう指導と支援を行っており、取り組みの浸透結果が継続的に現れている。引き続き、取り組みを推進する。	来年度においても意図した成果が得られるよう取り組みを継続する。
	2	3年次の調査結果において、授業時間外の学修（授業課題や準備学習・復習）にかける時間が前回調査と比べて増加はしているが大学生としての必要な学習時間の確保は不十分である。一方で、シラバスを確認している3年次学生は5～6割のみであり、ほとんどまたは全く見ていない学生が多い。	(1)	学修意欲を高める適切な指導により自発的な学修が可能であると読み取れる。授業担当教員は、毎回の授業の予習・復習や自学自習の指示などをシラバスに明示して初回の授業などで説明する。さらに、学生に対して、授業で得られた知識や考え方が今後も自分にとって役立ち有意義なものであると意識づける。そのために、教員は学生の授業時間外学修の成果を活用することができる授業展開を工夫する。	改善計画を教授会で説明し、教員に学生の授業時間外学修の成果を活用することができる授業展開を工夫するよう促した。
	3	SIH道場で学んだ内容のうち、在学中の学修に役立っている項目は、看護学専攻と検査技術科学専攻では「文章の書き方」、放射線技術科学専攻では「専門分野の体験学習」が最も多く役立ったと回答している。	(1)	期待通りの項目が挙げられている。	来年度においても意図した教育効果が得られるよう準備を行っている。
	4	専門教育科目の授業内容の難易度が適切と答えた3年次学生は7～8割であり、難易度に関して特に問題は無いと考えられる。一方で、看護学専攻では、授業内容の水準をもっと高度にすべき、と答えた学生の割合が19%、放射線技術科学専攻では、もっと易しくすべき、との回答割合が15%と高い傾向にある。	(1)	授業内容の難易度と水準に関する回答結果につき、教育プログラム評価委員会での分析や学生との個別の面談等を通して詳細に状況を把握し、授業科目の到達目標をわかりやすく学生に周知・提示する検討を行う。	教育プログラム評価委員会で学生と意見交換を行った。授業内容の難易度や水準に対して問題を認識しているとの意見はなかったが、引き続き、状況の把握と、授業科目の到達目標をわかりやすく学生に周知・提示する検討を行う。

部局	調査結果から読み取れる事項とその対応計画				対応計画進捗状況等
		事項（問題点・優れた点等）		対　応　計　画　等	
歯学部	1	アンケートに対する回答率は、歯学科1年：67.6%、3年：77.5%、口腔保健学科1年： 86.7%、3年：53.3%であり、回答数が前回よりも低下している。本年度も、新型コロナ感染症の流行の影響による発熱による欠席（待機）期間も長く、学生とのコミュニケーションの取りづらい面が裏目に出たように思える。今後は、継続した回答率の向上が課題である。	(1)	今後は何らかの講義の後または担任制度を活用し、クラスを集めてコミュニケーションを図るとともに、科目の担当者に講義時間内に回答する時間を確保するなどして、解答率の向上に努め、正しいデータの収集を行う。	1年生および3年生に対して、アンケートの回答の依頼を複数回、行った。さらに、未回答の学生には、学務係からメールで回答をするように促した。今年度は講義時間内に回答する時間を確保することができなかったが、今後、さらに検討したい。
	2	大学の授業については「28.授業をつまらなく感じた」では〔１年次：歯学科64%・口腔保健学科69%、３年次：歯学科61%・口腔保健学科88%〕と専門課程においてもつまらなく感じている学生がおり、学生のモチベーションの維持や授業の工夫について改善を要すると考えられる。	(1)	つまらないと感じたのはレベルが低いからか、理解できないからか？が明らかではないが、学生も以前とはずいぶん変化してきたことから、教員側と学生側との間に授業に対する考え方のずれが生じているのかもしれない。アンケート項目につまらないと感じる理由を記載してもらうとより問題点が明確になると考える。また、教育・講義のスキルアップや参考になるようなFD等を行い、各自の改善を図る。	授業をつまらなく感じた理由が依然、明確になっていない。今年度は、FDにおいてハラスメント講習をおこなったため、教育・講義のスキルアップや参考になるようなFDができなかったが、次年度以降に、このようなFDの開催も企画したい。
	3	能力・知識の変化については、「42.一般的な教養」「44.専門分野や学科の知識」「43.分析力や問題解決能力」「45.批判的に考える能力」が増えたと答えた学生は１年次より３年次で大幅に向上しており、両学科ともに、問題解決型の教育プログラムが組まれている効果が現れていると考える。　その一方で、「47.リーダーシップの能力」が増えたのは〔１年次：歯学科24%・口腔保健学科8%、３年次：歯学科42%・口腔保健学科26%〕で他学部に比べてやや低く、「48.人間関係を構築する能力」〔１年次：歯学科64%・口腔保健学科38%、３年次：歯学科65%・口腔保健学科50%〕、「49.他の人と協力して物事を遂行する能力」〔１年次：歯学科60%・口腔保健学科46%、３年次：歯学科65%・口腔保健学科75%〕も同様な傾向を示し、これら能力のさらなる向上が必要である。「50.異文化の人々と協力する能力」「51.地域社会が直面する問題を理解する能力」、「52.国民が直面する問題を理解する能力」も低迷しており、コロナ禍の状況でフィールドワークや外国人との交流が困難であることや人とのコミュニケーションが難しいことも原因の一つであろう。 「53.文章表現の能力」「54.外国語の運用能力」「55.コミュニケーションの能力」「56.プレゼンテーション能力」「57.数理的な能力」「58.コンピュータの操作能力」においても増えたと答えた学生の割合が他学部よりやや低かった。	(1)	リーダーシップ能力・人間関係・協力が弱いということはコミュニケーション能力の低下の現れであり、まさにコロナ禍のマイナスの面が如実に表れていると感じる。グループ学習や実習が以前のようにできるようになったことから、今後改善されると期待するが、普段の学修においてもグループ学習とその後のプレゼンを設定するなど、前項目の講義内容の改善と併せて工夫が必要である。	今年度は、対面講義やグループ学習、実習が以前のようにできたため、コミュニケーション能力の向上が見込まれる。また、普段の学修においてもグループ学習やその後のプレゼンなど、実施する講義も増えた。
	4	英語能力に関しては、聞く力、読む力、会話力、表現力、書く力のいずれにおいても、ある一定の力（設問でB1 以上：留学などが困難でない程度かと考えるレベル）を有する学生の割合は、入学後、３年次とやや向上しているが、「81.どのように、英語の勉強を行っていますか」に対して、〔特に何もしていない〕と回答する学生が多く、「83.徳島大学における英語の授業についてどう思いますか」の答えに、〔教養教育、専門教育で行われる英語教育で十分である〕が筆頭になっていることは、将来自分にとって英語能力の必要性が十分理解できていないのかもしれない。	(1)	歯学部は、歯学英語や外国人留学生を支援する国際口腔健康推進学分野があり、外国人教員が在籍していること、外国人留学生を多く受け入れていることから、学生が日常から外国人との交流を通じて外国の言語・文化・風習(慣習)・医療体制などを学ぶ機会をさらに増やす。	今年度は、インドやインドネシアからの外国人留学生の受け入れがあり、留学生との交流ができ、外国の言語・文化・風習(慣習)・医療体制などを学ぶ機会が増えた。さらに、学生がフィンランドおよびインドネシアに短期留学することが実現できた。
	5	本学の教育内容・環境への満足度は「96. １年次SIH 道場」〔１年次：歯学科64%・口腔保健学科62%、３年次：歯学科52%・口腔保健学科13%〕、「97.初年次生を対象とした教育プログラム内容」〔１年次：歯学科32%・口腔保健学科15%、３年次：歯学科55%・口腔保健学科13%〕と低い。「98.授業の全体的な質」は〔１年次：歯学科36%・口腔保健学科46%、３年次：歯学科68%・口腔保健学科38%〕で、授業の質の向上は今後の重要な課題と考える。実際に、「102.学習支援や個別の学習指導」は〔１年次：歯学科32%・口腔保健学科16%、３年次：歯学科54%・口腔保健学科26%〕となっており、不満と回答する学生は少ないが、満足と回答する学生が低い。また、GPAや科目ナンバリング、カリキュラムマップの存在を知らなかったり、確認していないことが多い。	(1)	SIH道場については、その位置付け、意義についてFDを行って教員側の意識の向上を図ることが必要である。授業の質の向上や学習支援については、上述の個別の講義内容の充実を図ることと連動して、対応していきたい。内容についても再考する必要があるかもしれない。学習支援や個別学習指導についてはクラス内グループ学習や大学院生のTA等の協力を仰ぎながらクラス担任・副担任と協力して対応を検討する。 歯学科では、2023年度から担任2名に加えて副担任2名を配置し、4名体制で学生の指導に対応している。積極的に学生と対面でのコミュニケーションをとり、学生満足度を向上させたい。	授業の質の向上や学習支援を目的に、SIH道場の講義内容の見直しを教務委員会で行った。次年度は、プログラムを一部変更する予定になっている。大学院生のTA等の学習支援も行う予定である。 歯学科では、担任2名に加えて副担任2名を配置し、4名体制で学生の指導に対応している。口腔保健学科では、少人数のため、これまでどおり、2名の担任体制で指導している。今年度は、クラス懇談会などが実施され、積極的に学生と対面でのコミュニケーションをとれている。
			(2)	GPAや科目ナンバリング、カリキュラムマップに関しては、オリエンテーション時だけでなく、科目責任者や担当者からも常時確認することを促す。	GPAや科目ナンバリング、カリキュラムマップに関しては、オリエンテーション時だけでなく、講義において科目責任者や担当者から確認するように促した。
	6	図書館の学修支援サービスについて、歯学科では授業サポートナビの利用が多く、図書館を利用しない学生が少ないのに対し、口腔保健学科では授業サポートナビの利用がなく、図書館を利用しない学生が多い傾向が認められる。	(1)	口腔保健学科では、シラバスに記載し、授業サポートナビの利用を促す教員もいるが、学生の利用が低い。その理由として、認知度が低いことがあげられる。そのため、周知を徹底し、図書館の利用と自主学修の促進を図る。	授業サポートナビの利用の周知を行い、図書館の利用と自主学修の促進を促した。
薬学部	1	１年生・３年生ともに、回答者の７０％程度が授業の全体的な質に満足しており、さらに、両学年において、回答者の８０％以上が将来の仕事と授業内容の結びつきについて満足している。 また、両学年において、回答者の８０％以上が授業時間外に、他の学生と一緒に勉強したり、授業内容を話したりしている。	(1)	学生の大半が、自らの将来を考えつつ、授業等を受講できており、その内容等が学生のニーズに沿ったものとなっていると考えられる。 また、薬学部棟のスタジオプラザ等は多くの学生が利用しており、学生の授業時間外学修や学生同士のコミュニケーションの促進に大いに役立っていると言える。 引き続き、授業改善や学修環境の整備等を行っていく。	学部学生・大学院生と薬学部教員との懇談会を実施し、授業改善や学修環境等について活発な意見交換を行った。懇談会で出た意見のうち、対応が必要なものについては、関係委員会等で検討のうえ、その結果を踏まえて、懇談会の内容すべてを薬学部の全教職員及び学生に対して公表した。すぐに対応が困難なものについては、引き続き改善のための検討を行っていく。
	2	１年生において、回答者の７０％以上が生涯学び続け、教養・専門性を高める能力や新しいことに積極的に挑戦する姿勢が増えたとしている。さらに、同学年において、回答者の８０％以上が大学教員の学問的な期待を理解することがうまくいったと回答している。	(1)	１年生の多くが、薬学部のカリキュラム・ポリシー等を理解したうえで学修に臨んでいることがうかがえる。これは、ガイダンス等での教員による全体説明や、クラス担任等による個別指導等の結果が表れたものと考えられる。 引き続き、学生に対し、丁寧な説明や指導等を継続していく。	定期的にクラス会を実施し、クラス担任等による個別指導等を継続している。 さらに、カリキュラム等について、必要に応じて教務委員長等による全体説明会等を実施している。 また、新年度においても、今後の学修等に関するガイダンスを予定している。
	3	高校で履修していない数学、物理、化学、生物について、１年生の回答者のうち多くの学生は、大学入学後、高校の教科書等で勉強した、あるいは、教養教育の高大接続科目等を受講したと回答している。 しかし、１５％程度の学生は、勉強の必要性を感じたが、何もしていないと回答している。	(1)	新入生オリエンテーションで実施している復習テストの結果をもとに、高大接続科目等を受講した方がよいと思われる学生に対し、個別に通知を行っている。その成果として、多くの１年生は、必要に応じて高大接続科目等を受講しているが、勉強の必要性を感じたが、何もしていない学生も一定数いることから、ガイダンス・クラス会等でも高大接続科目等の受講について啓蒙していく。	次年度も引き続き復習テストを実施し、結果に応じて学生に個別に指導を行う。さらに、数学・物理等の基礎科目の重要性やその学修について、高大接続科目等の受講も踏まえてガイダンス・クラス会等での指導を継続していく。

部局	調査結果から読み取れる事項とその対応計画				対応計画進捗状況等
		事項（問題点・優れた点等）		対　応　計　画　等	
理工学部	1	理工学部では、学生の学修全般の支援、学修環境の整備、卒業後の進路の相談や指導を目的として、担任制度やアドバイザー制度およびオフィスアワーを導入したり、理工学部学務係や履修相談室および就職担当教員やキャリア支援室といった相談窓口を用意または広報したりすることにより、教員や職員と学生の間の信頼関係の醸成に努めている。一般に信頼関係の醸成には時間が必要であるため、１年生と３年生の回答結果を比較すると、１年生より３年生の方が醸成の程度はおおむね上昇しているようであるが、期待したほどの成果は挙げられいないように見受けられる。（設問25、30、31、32、33、37、85、89、101、102、123）	(1)	担任やアドバイザーとなった教員とその教員が担当する学生の面談については制度の導入後から行っていた。しかし、この数年間は、新型コロナウィルス感染症が蔓延したために、この面談を遠隔方式で行わざるを得なかったが、今年度（2023(R05)年度）からは、同感染症も小康状態となったため、この面談を原則として対面方式で行うことにする。また、オフィスアワーや各種相談窓口の存在や役割を広報し、相談しやすい雰囲気を作り出す。これらの取組みにより、学生が教職員とコミュニケーションを取る機会を増やし、信頼関係の醸成に寄与するような交流の実現を目指す。	新入生や編入生を対象としたオリエンテーションをはじめとした様々な機会または方法を通じて、担任制やアドバイザー制について、および、オフィスアワーや各種相談窓口について、説明あるいは広報してきた。また、今年度（2023(R05)年度）は、これまで変異による蔓延を繰り返していた新型コロナウィルス感染症も小康状態となったうえに、５月８日から２類感染症から５類感染症に移行したため、授業は基本的に対面形式で実施されるようになり、教員と学生の間のコミュニケーションは気兼ねなくフェイスツゥフェイスでできるようになった。特に、担任やアドバイザーとなった教員とその教員が担当する学生の個別面談は、コースやプログラムによって若干の差はあるものの、基本的に各学期の開始時や終了時を目途に実施され、履修、成績、単位、進級、進路などといった学修に関することだけでなく、生活に関することや心身の健康状態についても相談に応じている。さらに、学生が１年生から３年生まで、アドバイザーとなる教員は異動等がない限り変わることはない。仮に異動等でアドバイザー教員が変更になったとしても、面談の内容は一定期間の保管が義務付けられたため、引継ぎは円滑に行うことができるようになった。
	2	e-learningに関する調査（設問130-132(１年生)／設問133-135(３年生)）において、両学年ともに約70%の学生がmanabaでの利用が最も多く、次いでスーパー英語が多くみられた。インターネットの使いやすさ（設問118）は両学年とも満足している学生の割合は半数を満たなかった。「本学のeラーニングサービスが学修に役立つか」という問いでは、昨年と同様に、両学年ともに約60%弱の学生が役立つと回答し、その傾向は３年生の方が顕著であった。また、「eラーニングによる学修科目を増やしたほうがよいか」との問いでは、１年生は40%、３年生が50%と、昨年よりも肯定的な評価は減少し、特にその傾向は３年生の方が顕著であった。現在は、多くの学生がインターネットを活用して学習したり、授業を受けたりしているが、その約半数が満足していない実情も浮き彫りになった。	(1)	昨年度と同様に、インターネットを使った授業課題の提出が多くあるとの回答が両学年とも多かった（設問22）。これはオンライン授業が多く実施されていることを裏付けるものである。授業内容の理解の促進につながる方法として、両学年とも課題演習と振り返りが多く（設問19）、教科書・参考書・授業での配布資料以外にインターネットをレポートなどの情報源としても活用している状況が多いことも確認された（設問21、72）。最近では、一部の科目において電子教科書の導入などの教育環境のDX化が進められ始めている。今後は、デジタル技術やインターネット技術を活用して学びの場を充実させながら、多様な教育ニーズを満たせるようなオンライン学修方法やオンライン授業方法、ならびに、遠隔方式と対面方式の授業のバランスなどについて検討する。	昨年度（2022(R04)年度）までの新型コロナウィルス感染症の流行による授業の対面方式から遠隔方式への移行、および、今年度（2023(R05)年度）からの新型コロナウィルス感染症の収束による授業の遠隔方式から対面方式への移行の両方を学生と教員がともに経験したことにより、対面方式の授業と遠隔方式の授業のそれぞれについて長所と短所を実感したものと考えられる。このような経験を改善に活かしつつ、昨今提案されているデジタル技術やインターネット技術を活用した新しい手法を取り込みながら、より効果的な学修方法や授業方法について今後も議論していく。
	3	理工学部は１つの学科（理工学科）のみから構成されており、その理工学科は今年度（2023(R05)年度）現在で８つのコース（数理科学コース、自然科学コース、社会基盤デザインコース、機械科学コース、応用化学システムコース、電気電子システムコース、知能情報コース、光システムコース）と１つのプログラム（医光／医工融合プログラム）から構成されている。すなわち、理工学科は理工学科の１学科制であるため、学生は自分が所属するコース・プログラムがあるものの、それ以外のコース・プログラムの授業を受講でき、しかも、これらのコースやプログラムの専門分野は理学と工学の領域を渡っていることから、学生は理学と工学の両専門分野の幅広い知識や知見を修得することができる。このように、理工学部には学生が幅広い専門分野を修得できる仕組みが用意されているが、この修得を実現する基盤として、設問42から設問68までに示された能力の育成が必要となると予想される。さらに、今後、社会や世界で活躍する人材になるためには、設問42から設問68までに示された能力の向上に加え、設問76から設問80までに示された英語に関する能力の向上や設問82にあるような経験が必要となると考えられる。しかしながら、これらの設問の回答結果を１年生と３年生のもので比較すると、いくつかの設問ではまずまずの向上が認められるものの、大半の設問では著しい向上が認められるとは必ずしもいえない。	(1)	設問42から設問68までに示された能力の育成や向上については、４年生で本格的に従事することとなる卒業研究や概ね４年生で所属することになる研究室における指導や経験により培われることが多いため、１年生や３年生の段階におけるアンケート結果において、その能力の育成や向上に関する成果が顕著に表れにくいと考えるが、３年生までの幅広い専門分野の教育や指導を通じてもある程度は可能と考える。その典型的な取組みとして、学修の基盤となる知識、技能、態度を身につけるための「SIH道場」や分野横断型の導入科目である「STEM概論」に加え、所属するコース・プログラム以外の専門科目で取得した単位を卒業要件単位として算入できる規定の制定など、幅広い知識や知見の獲得を促している。このような取組みを通じて、設問42から設問68までに示された能力を培うための土台の構築を目指す。	設問42から設問68までに示された能力の育成や向上に不可欠な基礎基盤の構築を目的として、今年度（2023(R05)年度）においても「SIH道場」と「STEM概論」を１年生の必修科目として用意するとともに、所属するコース・プログラム以外の専門科目を履修できる制度を維持した。「SIH道場」に関しては、担当教員を対象とした研修（「FD」と呼ばれる）が実施され、担当教員として必要な知識や技能を習得し、授業の実施から振り返りまでの過程について理解するとともに、昨年度（2022(R04)年度）に実施した内容の共有と反省から今年度（2023(R05)年度）の実施する内容の改善につなげる取組みを行った。また、「STEM概論」に関しては、オムニバス形式で担当する教員らがそれぞれの講義内容を改善したり、２年に１度程度の頻度で教員の一部を入れ替えたりして、取り扱う内容や主題が固定化しないように工夫している。
			(2)	設問76から設問80までに示された英語に関する能力の育成や向上については、教養教育における英語科目（基盤英語、主題別英語、発信型英語）とともに、専門教育における学科共通の英語科目（技術英語入門、技術英語基礎１、技術英語基礎２）を通じて、英語に関する能力の基礎基盤の構築を促すとともに、英語の外国語技能検定試験（特にTOEIC）の受験を強く推奨し、その成績の向上を目標とさせる。また、設問82の渡航経験については、本学や理工学部の用意する留学プログラムやその留学を援助する奨学金制度に関する広報に努める。	設問76から設問80までに示された英語に関する能力の育成や向上に必須な基礎基盤の構築を目的として、教養教育と専門教育の英語科目を１年生から３年生にかけて切れ目なく配置するとともに、語学マイレージプログラムで７００点以上を卒業要件としたり、大学院入試においてTOEIC等の成績の提出を出願の条件としたりすることによって、学内の様々な英語プログラムの受講、および、英語の外国語技能検定試験（特にTOEIC）の受験や成績向上に対する動機づけを強化した。また、各種のオリエンテーション、説明会や懇談会などの場をとらえて、種々の留学プログラムとそれを財政的に支援する多様な奨学金制度について案内した。
生物資源産業学部	1	1年生の回答率が37.0%、3年生の回答率が48.5%と回答率が非常に低い。回答率が低ければ、データに偏りが生じ、実態を反映していない可能性がある。	(1)	1年生に対して、後期開講の全員が履修している専門科目において、調査に協力してもらえるように依頼する。3年生に対して、配属先の指導教員より調査に協力してもらえるように依頼する。	1年生に対して、後期開講の全員が履修している専門科目の授業内において、3年生に対して、配属先の指導教員より調査に協力してもらえるように複数回にわたり、依頼を行った。
	2	授業課題のために、図書館の資料を利用することが低い(問20)。また、図書館の学修支援サービスの利用率も低く（問124）、読書の習慣は非常に低い（問125）。一方で、Web上の情報の利用率は高い(問21)。さらに、レポートや宿題で、調べものの情報源は、インターネットが最も高く、次いで教科書・参考書・授業での配布資料となっている(問72)。	(1)	コロナ禍の影響で図書館を利用しにくい状況が続いていたため、図書館を利用しなくなった可能性がある。また、単に情報源が「紙媒体」から「デジタルコンテンツ」へ移行しているだけとも考えられる。もうしばらく、推移を見て、判断すべきである。しかし、インターネットの情報の利用については様々な問題がある。学生に、インターネットの正しい情報の利用方法等を教育する。また、オリエンテーション時に、図書館の利用案内を行う。	コロナ禍が落ち着き、図書館の利用が増えつつあるが、やはりレポートや宿題のための情報源として、インターネットの利用率が非常に高い。そこで、オリエンテーション時に、図書館の利用案内や情報倫理等の話を行う予定である。
	3	授業の欠席（ひんぱんにあった）が、1年生で多く、3年生でも時々ある（問26）。また、日常的に学修内容等を振り返り、改善点を見出し向上を図っている(問92)において「非常にそう思う」と「そう思う」を合わせてた回答が、1年生は35%と低く、3年生でも55%とそう高くはない。さらに、現在の自分の学修時間や学修態度に満足している(問93)については、「非常にそう思う」と「そう思う」の回答が1/3程度に留まっている。	(1)	現状について教員全員にアナウンスを行い、授業の内容、課題の与え方等を改めて考えてもらう。	現状については、教務委員会を通して情報共有を行っている。また、学部長や教務委員長、学生委員長等と学生との懇談会での学生からの意見や授業評価アンケート結果も踏まえて、毎年、授業の改善を実施していることから、もうしばらく推移を見て、教員全員に授業の内容、課題の与え方等の改善を促していく予定である。
	4	教員と話をする機会（問101）に満足しているという回答が非常に低い。また、他の学生と話をする機会（問103）も高くはない。	(1)	講義や実習等の機会を利用して、学生間、学生と教員間で交流しやすい環境を作る。また、学生や教職員が参加する交流会の企画をする。	コロナ禍が落ち着き、講義や実習で学生間、学生と教員間で交流をしやすい状況になってきている。また、学生や教職員が参加する交流会を10月26日に開催し、140名の参加があった。

部局	調査結果から読み取れる事項とその対応計画				対応計画進捗状況等
		事項（問題点・優れた点等）		対　応　計　画　等	
教養教育院	1	教養教育への学生の満足度について 「大学の教育内容・環境に対する満足度（問95）」では、教養教育に対する回答として、「とても満足」、「満足」と答えた割合の合計が、1年生で63%、3年生で59%だった（前回はそれぞれ59%、 57%。前々回はそれぞれ53%、52%）。今年度も昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症対策で教養教育の授業の多くが遠隔で行われたが、学生の満足度はここ3年間少しずつではあるが上昇している。	(1)	令和3年度から、教養教育科目は8科目群から4科目群に再編され、各学部の履修要件もそれに応じて改正された。新しい科目群・科目での学生の満足度をアンケート等で調査し、満足度の高い授業の実施を目指す。	2023年度は原則として対面授業が推奨された。授業評価アンケートにおける学生の自由記述では、授業の満足度に関する記述として対面授業と遠隔授業のメリット・デメリットに関する記載が数多くなされた。アンケート結果は授業担当教員にフィードバックされている。
			(2)	令和2年度から、新型コロナウイルス感染症対策として教養教育科目では遠隔授業が広く行われるようになった。その経験から学生・教員の双方が遠隔授業に習熟し、遠隔授業の利点・欠点が明らかになってきた。学生の満足度が上がっているのは、遠隔授業に対する習熟度が上がってきたことも一因であると考えられる。今後はコロナ後の状況を考えて、遠隔と対面の両方の授業方法の利点を活かした授業の実施を目指す。	授業評価アンケート結果からは授業の形式や内容の違いにより、遠隔授業と対面授業の利点に関する知見が得られた。学期ごとに作成している「授業評価アンケートの結果と分析及び提言」をPDCAサイクルに組み込んで、授業改善を続ける予定である。
	2	教養教育科目の授業選択について 授業の選択基準（問108）について、1年生では「好きな科目や面白そうな科目」が最も多く、「単位をとりやすい授業」は2番目の選択肢となっている。しかし蔵本地区の3年生の一部では両者の割合が逆転し、単位のとれやすさが最も大きな選択基準となっている。 授業選択の際に重視した情報源（問109）について、「履修の手引きやシラバスに記載された情報」が主であるが、「先輩からの助言や情報」や「友人からの助言や情報」の割合も高く、特に3年生では「履修の手引き」と同程度の場合もみられる。これは「単位を取りやすい授業」の情報を得ようとする学生が多いためと推測される。1年生の場合は情報源となる先輩や友人と知り合う機会が限られることに加え、今年度も新型コロナウイルス感染対策のため遠隔授業が多いことも回答結果に影響している可能性がある。	(1)	毎年、各学部の入学オリエンテーションで教養教育科目の説明会を対面・遠隔で行っている。また適正な授業選択のための授業に関する情報を学生へ提示する方法であるシラバスについて、シラバスのチェックを毎年行っている。ここでは必要事項の記載漏れのほか、再試験の有無、成績評価方法、反転授業実施の有無など、学生が授業の全体像をよりイメージしやすいように記載するように授業担当教員に依頼している。この3年間は新型コロナウイルス感染症対策等のため授業形態、評価方法の変更があった場合は、速やかにシラバスの変更と学生への周知を教務システムやmanabaなどを通じて行うようにしている。遠隔授業を一部または全てに取り入れる場合は、実施方法について可能な限り詳細な情報を提供する。	学生の適正な授業選択のため、各授業のシラバスの記載内容や記入漏れのチェックを教養教育院の教員が分担して行った。必要に応じて、授業担当教員にシラバスの修正を依頼した。また新型コロナウイルス感染症対策等のため行われていた遠隔授業が、今年度からほぼ対面授業に移行したことを受け、シラバスで各々の授業が、対面・遠隔のどちらの形式かが学生にわかるようにした。 4月の初旬に教養教育院の教職員が授業の履修登録の説明会（対面＋遠隔）を複数回行い、学生の履修相談に応じた。
			(2)	成績（GPC）のクラス間格差は受講者の不利益につながると考えられる。そこでクラス間格差の実態調査と格差を是正することを目的に、学期末で授業題目ごとのGPC一覧を検討し、クラス間格差の生じている授業題目担当教員や、授業を受講する学生が所属する学部と、教養教育専門委員会、教養教育実務者連絡会を通じて問題点の抽出、共有、検討を行う。また試験的にペアクラス間での成績の標準化の検討を行う。	昨年度に同一の授業の複数開講クラスで、GPCにクラス間格差のあった授業の担当者とFDを行い、授業内容・成績評価方法等について意見交換を行い、GPCにクラス間格差が出ないよう要望した。FDの内容は、受講学生の学部・学科と共有を行った。
	3	リメディアル教育について 「高校で未履修の数学、物理、化学、生物について大学入学後にどのように勉強したか（問75）」という質問に対し、最も多かったのは「支障を感じないので何もしていない」で、37%、44%（1年、3年）だった。次いで多かったのが「高校の教科書、参考書を使い、勉強した」で28%、27%、「リメディアル授業等を履修した」は25%、22%だった。学生自身の努力、あるいはリメディアル授業を利用することにより何らかの対応をしていることがわかる反面、「必要性を感じたが、何もしなかった」という学生もそれぞれ12%、11%（昨年度は9%、8%）存在した。	(1)	教養教育院では、高校で数学や理科の科目で未履修、あるいは大学での学修に不安のある学生のために、リメディアルとしての高大接続科目（数学、物理学、化学、生物学）を基礎科目群で開講している。さらに高大接続科目を追加することで、リメディアル教育を充実させる。またFD「高大接続情報交換会」を通じて、実施の検証・改善を図る。	11月30日にFD「高大接続情報交換会」を開催した。リメディアル学習としては従来の数学、物理、化学、生物に加え、昨年度から開講された英語についての実施の検証がなされ、改善が提案された。これまでのFDにおいては、当日の参加者のみでの実施であったが、昨年度より、FDでの報告部分については教養教育院のHPにてFD内容の動画が学内に公開することとし、当日参加者以外の人もその内容を把握できるようにした。
			(2)	教養教育院では、入学直後に「高校復習テスト（数学、物理、化学、生物）」を希望する学科に対し提供しており、その採点結果を翌日には学部に伝えることで、学部による学生への高大接続科目の履修指導にリンクさせている。またFD「高大接続情報交換会」を通じて、実施の検証・改善を図る。	FD「高大接続情報交換会」において、高校復習テストの結果をテストを実施した翌日に当該学科に伝えることによって、学科から学生へ適切に履修指導がなされていることが、高大接続科目の受講状況により確認された。「入学前学習」→「高校復習テスト」→「リメディアル教育」という流れは、すでに徳島大学に定着していると考えられた。
	4	語学教育について 大学での語学教育は、教養教育と専門教育における英語の授業だけでは不十分であり、学生の自学自習は必要不可欠である。しかし、1年生・3年生とも教養教育、専門教育で行われる授業で英語教育は十分という回答が約半数を占めている（問83）。 学習方法（問81）については、1年生では「TOEICなどの参考書・問題集を定期的に勉強」と「授業で使用している教科書・英語論文」の2項目が比較的多い傾向にあるが、3年生はこれらの割合が学部学科によって異なっている。特に蔵本地区の3年生では「特に何もしていない」がすべての学部・学科で最も多い。蔵本地区では1年生でのTOEFLで語学マイレージ・プログラムの卒業要件に十分な成績を上げる学生が多いことから、3年生での英語の学習意欲の低下を招いているのかもしれない。これはTOEFLの受験率が3年生で低下する傾向と対応していると考えられる。高学年まで継続的に語学の自学自習を促進するための方策が必要である。	(1)	語学教育センターが実施する語学マイレージ・プログラムの一環として令和3年度に新設したELCSでの語学プログラムは、語学学習意欲を高めるために有効であると考えられるため、プログラムの開設を拡充する。さらに、TOEIC・TOEFL対応プログラムとして、初級または中級など学生のレベルに応じたプログラムを複数新設する。また、上記のリメディアル教育に、令和４年度から英語を加えた。	2023年度には夏季にはTOEFLやTOEICを全般的に扱うコースに加え、TOEFL iBTの内容を用いて英文ライティングに特化したコースを実施し、冬季にはTOEFLとTOEICを活用したリスニング対策講座などを開講した。レベルについては初級者向け、中級者向け、上級者向けという大まかな分類はあるが、人数的な制約から未だ厳密なレベル分けは行っていない。受講者人数が更に増えれば、レベル別に細分化させることも可能と考えられる。
			(2)	TOEIC/TOEFLの受験率や、専門分野の語学学習に対する意欲が学部学科によって異なることから、各学部等の語学教育方針を確認し、専門教育と連携した語学マイレージプログラムを検討する。さらに、高学年での語学教育の可能性を、他の委員会（グローバル化教育検討専門委員会等）と協力して検討する。	語学マイレージ・プログラムの検討については教養教育院内で議論してきた。また全学的にはグローバル化教育検討専門委員会にて情報の共有と意見の交換が行われてきた。これらの活動により以前よりも方向性が見えてきたと考えられる。ただし、学部間に見られるニーズの違いなどへの対応はこれからも継続的に検討していかなければならない。

※事項・対応計画の枠の数は適宜変更してください。

※学生に公開することを念頭に作成してください。